

## 第2章 銃後

銃後の暮らし③

# 布団にもぐって行った必死の通信

木田忠夫さんのお話から

○通信 郵便、電信などの業務。

○モールス信号(符号) 長短二種の信号を組み合わせて文字や記号を表す電信の符号。

○機動部隊 航空母艦を中心とし、巡洋艦、駆逐艦などで編成され、航空戦を主な任務とする高速艦隊。

○艦砲射撃 軍艦に備えてつけてある大砲などから弾丸を発射し、ねらい撃つこと。

○グラマン アメリカの軍用機メーカー。第二次世界大戦では、戦闘機F4F、F6Fが有名。

私は昭和二年(一九二七年)にニセコで生まれ、昭和十五年に札幌の札幌通信講習所に入りました。そして、大東亜戦争が始まりました。二年コースの学校でしたが、戦争と同時に半分の一年で職場に行けということになり、昭和十六年に留萌の郵便局に就職し、通信オペレーターとなりました。

私は、郵便局でモールス信号を扱う通信オペレーターをしましたが、ほとんどが軍事通信でした。通信を受けて、部隊に届ける仕事をしました。職員ではないほかの仲間は、特別幹部候補生で兵隊になりましたが、私は通信オペレーターだったため、兵隊に行くことはありませんでした。

そして、終戦一か月前の昭和二十年七月十四日から十五日に北海道空襲がありました。下北半島にアメリカの機動部隊が来て、空母レキシントンが主体になり、室蘭に艦砲射撃を行ったのです。レキシントン級の空母が十三隻も来て、グラマンが二千機来て、北海道の主な港を徹底的にたたいたのです。根室はほとんど全滅でした。

留萌は十四日に空襲を受けました。私は郵便局の泊まり勤務の日で、早朝、六時か七時からいだったと思いますが、眠い目をこすって窓を見ていました。

郵便局はちようど高台にあって、下の方に港が見えるのです。ぼんやり見ていましたら、立派な飛行機が目の前に来たのです。私は、日本も随分すばらしい飛行機をつくったなど思いました。アメリカ軍から空襲されるなんてだれも思っていなかったのです。

○機関銃 引き金を引いている間、自動的・連続的に弾丸が発射される銃。

○防空壕 航空機による空からの攻撃から身を守るためにつくった穴や地下室。

○疎開 子どもや病人、お年寄りなどを戦争の被害の受けやすい地域からより安全な場所に移り住まわすこと。

飛んできたグラマンはすごい能力で、港の船を一斉攻撃しました。その機銃の音は、日本軍が撃つ機関銃のカタカタカタという音ではなくて、ザーツというものでした。郵便局の上空から射撃が始まったのですが、ものすごい音でした。この音を聞いたときにこの戦争は完全に負けたと思いました。

泊まっていた交換手も五、六人いたのですが、みんな職場から防空壕に逃げました。しかし、通信担当である私は、逃げるわけにはいかなかったのです。私は慌てて布団を持ってきて、通信機の上にかけて、そこにもぐって通信していました。札幌や旭川に、空襲を受けていると通信しなければなりません。あのころは、お国のためという時代ですから、任務を与えられた自分としては、その任務を果たさなければならぬという気持ちでいました。

留萌には、日本軍も少しいて小学校の裏に穴を掘って機関銃を撃ちましたが、グラマンの機銃とは全然レベルが違いました。港は船が攻撃されて、火の手が上がっていました。

空襲の犠牲者は、船員たちです。何人もの船員が血だらけになって肩に担がれて病院まで行ったのを見ました。撃たれた人は病院まで血だらけで歩いていました。

そしてその晩、留萌の市民は一斉に疎開を始めた



イメージ図

通信オペレーター

布団にもぐって行った必死の通信

○魚雷ぎょらい 艦艇や航空機から発射し、水中を自走して敵の艦船を撃沈させる兵器。

のです。留萌るもいのまちは無人になり、いるのは我々と消防ぐらいでした。私は疎開そかいできませんでした。動いてはだめだと軍隊から言われていました。通信を確保かくほしなければいけないからです。アメリカ軍に機銃きじゆうで撃たれたらもう終わりです。

留萌るもいのまちは真っ暗闇やみになり、本当に死のまちのようでした。空襲くうしゅうのときは生きた心地がしなかつたというのが本当のところでした。また来たら完全に生きていられないと思っていました。次に、留萌るもい沖で攻撃を受けた船の話です。これは終戦から八日ほどたったときのことでした。

樺太からふとから避難民ひなんを乗せた引揚船ひきあげせんで八月二十二日に出航した泰東丸たいとう、第二振興丸しんこう、小笠原丸こがせきの三隻が国籍不明の潜水艦せんすいかんに魚雷攻撃ぎょらいを受けたのです。

泰東丸たいとうは、沖合で沈没ちんぼつして、一人も助かりませんでした。小笠原丸こがせきは増毛沖ましげで沈没し、七百二十名のうち、助かったのは六十一名だけでした。あとは全員死んでしまったのです。

ただ一つ沈没を免れたのは第二振興丸しんこうでした。船倉に魚雷が命中して、大破炎上たいはえんじょうしたのですが、約三千六百名の乗船者のうち、五百名は死んでしまいました。船の中はひどい状態だったようで、魚雷の爆風で吹っ飛んだ首のない死体や片腕のない人、天井からぶら下がっている女の人の遺体いたいなどがあつたそうです。



イメージ図

空爆

朝の八時か九時ぐらいに岸に遺体が並べられ、お母さんの遺体にしがみついて泣いている子どもがいました。さらに、港の海面は死体だらけでまさに地獄でした。

ただ、ありがたかったことが一つありました。あのころは食べ物は何もなく、芋かすや中国のトウモロコシみたいなものしかなくて、白いお米なんて食べたことがありませんでした。私は栄養不良になって体があちこち腐っていました。そういう状態のときに、第二振興丸に米や干し米が積んであり、我々に配られました。血や海水がまじっているかもしれないような、黄色くなった米でも、本当においしかったと今でも覚えています。

食料事情は本当に厳しかったです。これは、今の子どもたちに言って聞かせたいです。食べ物のおかげがたみを知ってほしいと思います。また、今、いかにいい生活をしているかということに気付いてほしいと思います。

私は、終戦の一か月前に空襲の体験があり、悲惨な船の状況も間近で見ているわけです。戦争は、戦地から遠く離れた北海道でも大空襲が行われ、罪のない女、子どもが乗った引揚船も魚雷でやられたのです。

戦争は悲惨ですごくむごたらしいものだから、絶対に風化させないように語り継いでいかなければならないと思っています。これは自分に課せられた義務だと思っています。

みなさん方も、戦争にのめり込むような動きになってきたら、やっぱり戦争に反対するという声を上げないとだめだと思います。戦争は二度と起こしてはいけません。

## DATA

平成21年度厚別区平和事業  
聴き取り

- ・平成22年3月3日
- ・厚別区役所



## 木田忠夫(きだ・ただお)さん

- ・昭和2年(1927年)生まれ
- ・札幌市厚別区在住